特110
695

曲譜
正調 筑前琵琶歌

水也田旭嶺 花

250

始

特110
695

序

近時我が流行琵琶は他日界天の執
地方家庭音樂として紳士淑女に歓
迎方一方に於劇界も亦琵琶弦歌
用す為方法数年間に急足の發
展せりたが之に付なって琵琶の著書も沢
山発行されて居りますが唯譜の正

正 第6
4. 4.
交内

以上の文章の間違の無い完全な著書の出るのは
實に嘆かわしい事でありますす
茲に於て海志が多年研究したる正傳なる曲
譜伐術春（初傳）夏（中傳）秋（奥傳）冬（皆傳）及び
雪月花の七卷に分ち書き改めし
ますた所以であります

水也四旭嶺識

曲譜及曲節

一、二、三、四、五、六、七、甲、乙……音　調
八……合の手の譜
〃……流しの譜
春……春節
夏……夏節
秋……秋節
冬……冬節

山　山越節
旭　旭節
ク　雲節
ツ　露節
月　月節
タ　夕日節
風　大落し〜小落し
ア　憂愁譜

悲哀の譜
崩勇壯の譜
五絃節及十二段秘曲の合手
吟變（例ぜば五六の中間の声）
續　き
歌、又は歌の類
詩、又は詩の類
琵琶の合の手

番、号、丁、島名
木、火、土、金、水、地、天

目次

別れの盃　一頁
小袖曽我　一〇頁
荒乳の開　二五頁
清普　菰原信頼公　三七頁
清普　國盡一　四五頁
乃木將軍　五〇頁
六代君　上假　五九頁
六代君　下假　六八頁
芳流閣　七六頁
吉野山　上假　八三頁
吉野山　下假　九〇頁
七騎落　九六頁

淘伸上げ
伸べ上げ
淘伸下げ
伸べ下げ
抄ひ上け
強め
大廻し淘伸べ
淘り廻し

筑前琵琶歌

花の巻

水也田旭嶺編纂作曲

別れの盃

（五絃曲譜）

一 敷島の大和心は人問はば
朝日に匂ふ山櫻

二 亂れて咲ける花の意は
散りての後に人や知らん

三 茲に赤穂の浪士
赤埴源藏重賢は

四 主君の仇を報いんと
三味と結ぶ剣太刀

とげる心我知られども
いたくも醉へば路狼きに
恩ひ我人の知る面も
指して我笑ひ嘲りぬ
志我ば知らんや
なめし辛苦我晴すべき
兄の業田我訪づれて

人目我計り恥る酒
に暇なき水鳥の
アラ笑止と後指
燕雀何ぞ大鵬の
晦まし過ま二年
時は今宵となりければ
心の暇申さん

出づれば袖にかゝる雪
力の束に酒徳利
重きは積る雪なる
道行く人は芦田鶴の
床しき様我重賢は
赤唄うたひて程も
酒に乱せし跡我

浮世我忍ぶ笠合羽
結びて輕き武士の
今宵と散る白刃の
徘徊すると打見
笠も千鳥の醉心
嵐の庭や雪の門
咎めもなくて數々の

情け給ひ兄上は
言ふて此の世の別れ残ば
兄伊左衛門は出仕なる
甥興之助は師の浮る
誰れに名残惜言ふ告げの
帰る待なん様なく千鳥
之紋染めたる羽織の

姉しの前の一言を
告げんと思ひ来て見れば
姉は病の床に寝ね
行さしと云へば是非なく
鳥に心のせかれつゝ
衣桁に掛け兄上の
前に座を占め携へ水

酒取り出だしながら
別れの酒酌みかはす
兄上帰りまうばば
いる大名に抱へられ
時元には家来八番
イト残念と傳へて
石子いなわり給ふ様

真の人まうす如く
やがて傍への侍女に向ひ
源蔵此度西国の
明日出立すべけれぞ
目通りせぬ心の中
また姉上には病
興之助には学問出精致す様申傳へ

六 體だに健ならば又二の時か
七 さり乍ら老少不定は世の習
五 若し兄上に先立たば
三 醉なる体すてまじき色ど
五 涙我飲んで立ち帰へ
七 されが此の家の見納
三 降り〻雪の其中我

逢へき時とのりぬ便
夜半の嵐の吹きすさみ
不悌の罪は許し給
心に源ぐ万斛の水
心の中ぞ痛まし
思へばいとなつかし
見返りがちに童顔は

三 兼て嗜む鉢の木我
声もかすかにたゆがれぬ
五 町辻々に立ち騒く
六 喝破と斗り起る上り
四 見届け兼れこのりければ
七 走り出づれば伊左衛
四 待つ間程なく綱平は

乱世五丁
大れば布

中 口吟み行く後影
六 雪に明け行く大江戸の
四 声いぶかしみ伊九郎門
六 何事なるぞ急早く
六 老僕綱平かけ下り
五 玄関先に立ち出
六 息せき切て馳せ帰り

主人の前に両手を突つき六番下
大石殿を始めとして四十七人吉良邸へ
打入りめされ上野の介
首打取つて亡君の
霊に捧げまらんとして
六しテ年の源蔵はと
源蔵様は凛々しくも
血汐を浴びて有様
昨夜赤穂の五家中
大身の槍を提げて
殊功さこそと思はれて

綱平までの面目
扨さて昨日糸りは
申さん為に有つたりか
武士の誉の姫心に
涙にぬれは暮れ
心も赤き赤埴は
感ぜぬものはなかりけれ
言ふを聞きたる伊尤門
今生まれの暇乞
なごり悲しされど
徇はせまりて言葉な
血汐に染め大事装
男も義も有る武士と
誉は今も残りけり

小袖曽我

今日出でてし明日は雲井なる名も高き富士の裾野の将場なれ

十八年の春秋経て

一日迚時も忘れ得ぬ

父祐康が妄執

さわさわながら時致よ

今に始めぬ事ながら

我等兄弟先立ちて

嘆や歎かせ給ふ

今生の此暇申上げ

必ずく露程も

母に知らせ給ふなよ

仰せ畏み候ぬ

ヨク〳〵我等兄弟は

七十世の人と聞き給はず

只うれしなく心の内

潔く旅立

我等が思い立ちたる事

兄が言葉に時致は

姫何ぞ郎祐成殿

親子の契り薄くて

幼き時父戦討たれ
せめては母のほかたみ
肌身離さず最後まで
彼の攀檜が戦場へ
母衣の心ふかく一番下
法師なれども義訓
三年なのかた母上より

今又母を先立つ事の
哀小袖なり已賜り
母を添遂奉らば
母の衣裳身に着ケ
ながれをつけて給集は
情きに不忍是非なし
故勘蒙る身にあれば

兄上なに計ひてよ
祐成弟の手を取り
集は滝中上げ
打ち連れ立て兄弟は
勘蒙る時彼は
障子一重はうかねば
母の居間へは入兼ねて

打萎れて語り
イザ其許の勘蒙は
袖も賜はらん
母の涙へ起き
流石にうれし
門を堅き心地して
廣縁の隅に畏

祐成母に申様
汐汰蒙る身なるねど
将の御供思立てゝ
いとしやかゝ見ければ
北條殿様始めとして
其外歴々の若殿原が
馬物の具も有らばこそ
鎌倉殿より我々は
末代迄の物語りに
小袖一重賜りゝ
十二の将の御供者や
三浦梶原畠山
きらびやかなる出立へて
りれさん母は悲しゝ

将場の角ばゝ仁猶
命様 緒ゝ給ひつる
なろく事なら将の御供
斯く申ば此母が
さらば小袖参らせん
神なるぬ身のならねの
千草様縫へる小袖
身が父の祐康が
不吉の場所に候ゝ
思ひ止り給ひよ
小袖一重惜しに似ず
これが此の世のかたみ
情の露も深草や
模様面白ければ

母の手づから賜りける金
志ばし持ち給へりしが
特場の膝着に百かの一
思入て申す
障子にヒレ巳身残よ
母は怒りの声高
妾は此の世に居身の外
祐成是を押戴
其同様時致ふも
小袖一重賜りて
首尾や如何に時致は
奥の様子窺へば
うち時致は誰が事ぞ
禅師法師と
二人の小供候しが
叔父なる人のはごくみすて
尤とも外は箱王と申す
もはや勘当せし上は
すげなき言葉に祐成は
汝廣縁に和へ候て
ソハ誰が許し候ぞ
其禅師はムツキの内より
今は越後にゐりと聞く
子の候しが
親子の縁も候はずと
其時致は箱王すて
云わせも果てず母親は
疾く追出し給へかし

六 鋭き母の法作 地天泰
七 蔭に立聞く時致は
三 人目なければ廣縁
四 斯くては果てじと祐成は
五 七生迄も御勘當
六 生きて甲斐なき者なれば
五 打落し申さん 水火既濟
六 噛待て志ば祐成
四 看

一八

旦 頼みの綱切れ果てぬ
四 泣きくづをれて居たりける 鳴
七 刀の鯉口くつろげて 地水
五 法 許なき上 地水
五 兄が手に掛け其細首
六 既にコーヨと見えければ 水

四 輪なる子我持ちだに
慌 野の雉子夜の鶴
三 右と左は兄弟我
三 親の心我子は知らじ 水地天
五 首切る事の有るべきや 澤
五 すがり歎けば祐成は
四 ユハ勿体なし難有や 火土屋水
四 はさまぬはいくらじ 水々
四 扨は正勘當ゆれなる
五 姉 涙はかきくるし

十九 親は悲む習ひぞや
五 子故に迷ふ親ぞ哀
三 両手の玉をうしむ
五 其現在の弟乃
四 母はさまぬはいくらじ 水々
四 扨は正勘當ゆれなる
五 姉 涙はかきくるし

弟の手を取り静々と
母は一目見るよりも金々
先立つものは涙まく
夫れゆめのうちの有無は
流転生死の夢の世ま
さしば刹那の間ふも
思へば無為の決楽ぞか者
母の前にぞ出でに呼ぶ今
互いに手に手を取かわ
志ば言葉も無かりけり
有無としに無なり
何を幼と定むべき者
心を暢ぶる道理を
いで三人打寄りて

志ば心を慰さま金と
首出を祝ひ給ひけり
別れの事更悲しは
夫婦の思と兄弟と
袖ぬれる思い者と
せきくる涙せきとめて
舞い納めたる時致が
銚子盃取り出で
時致扇打かぶり金
親の別と子のなげき
いつれを為わて思べき
残て留る関しがなと
袖のかへに絞らかい
心の内で哀れ哀れ

斯くて母より時致にも
祐成諸共甲斐がしく
二人が小袖は亡き跡乃
やまと忘ぼ小袖より
手跡にすがる遺念
忘れかなみ残さんも
けふ出でゝめぐり逢ずば小車の

同じく小袖賜まり地
兄弟聴着に着替へつゝ十九号
形見にうれと留めしが
後の世まで盡させぬは
いざや兄弟一下筆づゝ
墨すり流しかゝばかれ十番上

このあのうちなりと知れるみ
祐成生年廿二
ちゝぶ山なるす嵐の烈しきに
枝ちりはてゝはいかに世人

後の世の形見とゞ書なり
十八番下

五郎時致生年廿
集り逢ふべしと示れ
心残て曽我の里水

必ず未来は浄土まで
いざ時致よ祐成後
見返りて兄弟共

狩場に指して急ぎ行く
峯のさなたは箱根山
其水茎の筆の跡
小袖乞て今に名を
雲井と共にや高き
道も険しき足柄の
流れも清き早川の
孝心深き兄弟が
語り傳へて富士が根の
佳名世々に留めけり

荒乳の関

一 西海の怒濤鏡に鎮り　東海の覇業将軍成る
二 今此時機を惹き起す　逆櫓の怒雷取り揖は
三 いのはれ戦功ならびなく　名声天下に耀けり
四 九郎判官義経も　兄頼朝と不和成り
五 世の仇浪に揺り揉れ　流浪の身とは成り給ふ
六 さてもはかなき人々は　就鳥尾に岡伊勢駿河

其外同勢十二人
殊に武蔵坊弁慶は
遥かに奥州路心ざし
時も頃は文治二年
名残惜しく今出川
浦とはかなき栗田口
いつか大津の浦越へ

山伏姿に身をやつし
作り先達ふ装ひて
都路をば出でにけり
如月十日の夜深き
流れ行く身は泡沫の
まだ来ぬ時をまつ坂や
行方も今はらいげの

神の御社伏し拝み
海津の浦に着き給ふ
けば程なく越の国
漸くたどりたの腰
折しも行交ふ山賊等
悼ばや人の修験者
平宮殿とうたがわれ

寄る辺と頼む甲斐なく
頼て陸路急ぎつつ
時吹く風の荒乳山
三ノ口へも近づけば
しろめき作り袖乞ひ
行くての関に懸りなば
憂き眼にのはむと耳語

義經弁慶に招き給ひ番

我等に堅く撰ぶ由

備は君の下向に計り水

唯打破りて通り候事

行く方遠き旅の空

機に臨み変に應じ欺

静に通り然るべく水

此先に關所に没

いかにせばやと仰せ十二番下

俄に構へしのと存候番

容易き業には候へ共

来こそ殊に大事なれば

弁慶の一議に任せ比

夜さら強くし夜出る

偽然として進み出の場合

茲に加賀國の住人

藤倉殿の嚴命に依り

淦議の爲めに控へたり六番

大ワやばかり関守ぞし

是こそ判官の正身なる牛弁きたれ番

我から向ふ燈火の

井上左衛門は

心ならずも山伏ぞし

斯る所に義經主従来りれば

前後左右に押取囲み

尤衛門徐かに制し金々
承り候尤り作ら我等は
何迚斯程騒動せられ候や
いかゝ今度刹官政偽山伏と成り
山伏城堅く揺べゝの仰により
尤れば偽山伏城内に停めおへ
雑慶相氣色ばみて申ける七番
いかに客僧達是は関所と金土
羽黒山伏まゝ候ま
弁慶落付てもんどけ十三番
奥秀衡城頼み上下の為
尤情つ承りて山伏城内に十七番
いかで羽黒山伏の停めらるべき
尤衛門少時傾き居たりが金

イカサマ客僧達は真の山伏まゝにわすらー
異議なく通し申すべ土
高下城内は関手城取り
先づ関手城出し給へと申ける五番
いつの習慣に羽黒山伏の
例なき事は叶はずと水
尤情門心こゝろかに感ぜが
イカサマ客僧達は関所の山伏まゝ
尤り作ら鎌倉殿の御書
関守等の兵粮米にせよと
偽山伏事城内に水
関手城出す法やうの
弁慶更に取り合はず十番
尚も一事たのむ三番

然らば関手取るに取らざるは
此に同坐停置くべし
弁慶等少し驚かず
即使上下の程心易くやすらひて下らんと
各々筵敷関屋に引入れ
主人顔に振舞少し驚
開守共今は氣遠く集れ
開来へ左右坐承り合
いと儀かに申
是は金剛童子の
唯通せやと強に許され給ひしが
急ぎ立たむ等色も
真の山伏とは思め給はり
然らにはの二三日の間
関屋の糧米少し賜はれと
冥守共のきしなる顔色
判官殿かと紀せば
斯関は免せられ度上は
よろこび入り候
齋に事欠き候へば
餘儀なくに申け
物も覺へぬ山伏
口強くに返事坐

其上齋料迫乞ふ事
尤情つ莞爾と打笑みて
うれ進らせよと言ひければ
雜慶ふれ戒受け
ワザと義經にのらくくと申けるが
義經謹みて請取り給ふ
雜慶頭イツツ立ち上り
如何にも心得難し拒みが
何にも祈禱すそうのれ
唐櫃の蓋に白米盛て差出
ヤア大和坊ソレ取れと
心の中ろ痛ましい
腰の法螺貝取り出て

れびたゞ敷吹き鳴らー
日本第一金剛童子
奈良は七堂の大伽藍
稲荷祇園加茂春日大神
願くば判官此道に懸参せて
荒乳の関守留させ給
羽黒山の潰岐坊が
いと尊げに祈祷なりぬ
葛城は十方の満山の護法神
初瀬の十一面観音
比叡山王七社の宮
勲功抜群ならーめ
験徳の程を示給へ

嗚呼昆羅叫々
頼母子げにも開守共
斬ふにしく一回筑球負ひ
盡きぬ武運も源乃
加護もゆらちの開越へて
落ちゆく姿ぞ男すき

珠數サラ〳〵押揉め、
聽耳せしより笑止なる
悠々こして通りけり
民我守りの方矢神
落ちゆく姿ぞ男すき

三 藤原信頼公

斬かる處に熊野より
數千の兵球引卒し
早王城球囲みけり
罵りさわぐ其中に
惣大將の信頼公
三枚鍬の龍頭へ

引返しなる清盛
四方の門より牛々と
スワコソ敵と人々が
一人人の眼まる立つは
其いでたちも花やかな
緋に縅したる鎧には

赤地錦戎羽織なり人々
天晴大将ぶりすと
只大浪の寄するかと
ハ何事ぞ大将
わなゝき震ひ手に取り
再び擧ぐる声々
大地に揺と落ちなりけり

人々是を仰見て
言ふ間も響く鬨の声
耳もばだつる時しもの
俄に顔の色を変へ
手綱も落すばかりなり
早鞍坪ぶなり兼ね
落場やあき御大将

思はずハッと鼻を打ち
死人のめゝ其顔
下部の方に扶けられ
コレ今日の一番手柄
人々ドッと打笑へば
やゝ者共笑なせそ
身震するは武者震ひ

ひのいにく逆る大鹿血
唐紅を彩どりて
再び駒に乗る様は
血汐の姿勇さよと
大将は震ひ声
勇士の習大敵に
震ひの強きは勇氣強

イデ清盛の鱠入道
重盛其他の小冠者ハ
コハ二鍋よ打込で
者共来れと大門の
大将は馬上まて
祈るもいとど殊勝なる
夏武の峯なる先祖様
生捕来て酢鱠にせん
箸にも掛ぬ小魚ども
個煮にせんとれむ
彼方よりコハ進みけり
日頃信ずる神とも
其他の神の名前は

事急にして申されず
攻め来る敵に今茲で
瘧が叶はぬ事ならば
頓死急病させ給へ
肺病なりは手ぬ
斫込む太刀は飴の棒
此の信頼に怪我さすな
アレ信頼一期の願
瘧ぬふるわせ給へ
心臓破裂か脳出血
赤痢脚氣や子宮病
敵の矢の根は牡丹餅となれ
神の力が有るならば
くりかへしなる苧環及

一系の乱れの亂軍ふ
コハ叶はじとは大将
れ大将と言ふものは
陣戦千里の外に取る
匹夫の勇と知らざるか
心定めてヨク防げ
後戦向ひて進むなり

敵は名に負ふ重盛也
コヽ一代の声はり上げ
身は惟幕の内に居て
打物取っての戦いは
汝等茲に討死せ
我は逃ぐるに有らねども
逃げはにげが道れ得ず

身は捕はれて人目すも
係りの人はなさけ有る
ヤヨ信頼敗北身には
望みも有らず申されよ
望と言ふは只一つ
命助けて得させよ
仰るせと伏まろび

引き出さいなる首切場
武士なればあぢろふ
今が此世の最後なる
耳そ信頼打表び
叶へて給へ望みとは
言ふより外は有らざる
万戦者て人様なければ

武士寄を押し伏せし人
信頼必死の声高く
イト珍らしき事共なり
好まぬものと定まれど
命城取られ汝大将
人は代名は末代
語り傳へて自生後けれ

首級かんとするからに
人殺人殺ぞと叫びは
死めてふ事は皆人の
況て斯く迫情まるく
イトド哀れに痛はし
天晴見事の大将
語り傳へて自生後けれ

平三 誉國盡

扨も日本國盡で申さなく
カ賀の其の名がお國さん
是喃申國平さん
初めて近江の其時は
年も若狭の花ざかり
男も上德ゆる中に

真っ至の其の名が國平で
或日の事カ賀のお國の云ふと
お前と和州と
和州も志摩だ
一目美作の前の姿人
下も岩見のない男ぞ

五 いもからの前の使ひす金人
三 ちらが加賀になるならば五春下
四 岩陸目には合すまじく水地
五 神に頼みー甲斐なりと
三 紀伊の思ひがい但馬す三子
六 相模に深し言い河内
七 越後国幡と出羽出たが年郎人

四六

八 ちもじも河の内に信濃は
四 山城大和の奥に住むれも
八 云はす時の姉ーさは
三 出雲の神の子合せじやと
五 伊勢も参ぬ夫婦やへ水地
中 大隅なれー古佐渡城
六 頃は下野中旬すく

六 岩代白と雪降りの
四 陸中陸前ゆる時
八 備中くぬれわらじ
六 恩の念は岩城も通す
五 渓路暮ーの駿河くし
四 流球がすりや八丈島
三 路金に使い果ーたが

四七

五 早や入相の陸奥の鐘
四 風呂敷包城房州の先つかけ地
八 道もはるー長門の旅人
六 譬肥後の美濃尾張よ
三 周防に二人が薩摩よい春
四 筑前博多の帯近も
三 遠江の隠岐防芸極め

心越中と定めつゝ
豊後むろ城數つめて
丹後一ツで米城一ツ
時前はたつた越前で
三度の飯も伊豫の河波の
稼ぐに追付貧乏なし
丹州はいらぬ稼ぎ出し

武藏なる所に甲斐の
取付世帶の事なれば
羽後ゝも二人が其中に
上野一本のらばさろ
摂津ない目も飛彈る目も
日に利の付く肥前豊後
河波嬉やと思間なく

元の淡路に打忘れ
外に備前な女子の出来
姫何に男の上物じやとて
稼ぐ前の様な土佐がある
台灣声城はり上げ
ゆゝ北海道するなかれ
手には肥前城が流
お前の心が丹波と変り
ろれで和泉城安藝の國
チットはあまも但馬やんせ
云はれて國平膳城立
エイちゝ性奴が山陽道の
貴様のやうな備中は
伊豆見ても讃岐の様な

陸中らしい事ぬかすな
伯耆で能登守播磨の國
伊豆こそなりとも壱岐対馬
日本一まいぞ仕方なし
只唐々と打笑へ

乃木将軍

秋風露霜ふみて袖ぬらす

加賀の備後守ヒツかみ
ちのらが様な日向な奴は
いはれしら國は引止まり
海原ばなながめつゝ
未は満ぬ心まりけり

大正元年長月十有三日に

明治天皇の御大葬
重ねて絞る袖たもと
茲に乃木陸軍大將は
下に泣ひて五番目
上ば敬ひ下ば換へ
知るも識らぬも渚共
曾て振順の攻撃に

哀しみ悲しい國民が
身も張り裂ける思ひ
明治大帝の軍人に
堅く守りて怠らず
其真心に勵まる
君が歳月ば暮ひけり
二児ば失ひ勲功ば

樹て世界の英雄水へ
心を決する事の如し
東宮御所に参内し
涙れて言はねど岩清水
奏し終りて清然
此れ今生の御暇乞
君の御姿拝せし事
仰がれなりし將軍も
御大葬儀の前の日に
皇太子殿下に拝謁
清き流幾何くれて
渥き来る涙押へつ
又と再び此の世
思ひも寄らざりき

五二

重き役儀を捨て
流石に猛き勇將も
時しも轜車の出ます
文人と共に先帝の
最後の御別告げし後
涙みなく駒の足掻さへ
家に帰りて仕人
我身の罪も軽からず
心乱るばかりなれ
日頃熟慮の將軍は
御尊顔を黙拝
病と称して退出
後に引かるる心地して
靈柩見送り来れよと

五三

出して残るものもなし地水、
桃我皇后に面せしめ金々
奉安なし伏拝み大番上
学び世我神さりまし君大君の土
拝のみ老たいて我は行くなり十三
辭世の和歌我書遺し正服つろげ悠々
暫し時刻我まつ程なく宵闇破る吊砲の
十七程上

五 イザ此時と取り出だす
明治天皇の御尊影

五 二尺に餘る軍刀我
六 グイと計りに引き通し
六 動脈見事に破り
五 いと勇ましく最後
四 豫て覺悟の事なれば

六 響き渡れる一発耶
十七上
五 九の腹に突き立て、
六 返す刀頸部
四 がっぱと計り伏しまろび
十二号
六 見守り居たる夫人には
四 気や妻も参らんと九番下
五 いでまして帰ります日のなごり

三 けふの幸に逢へば悲しき十八年

六 此の世の名残と書き記し

五 見事実に立て注ぎの地

四 あゝ名将に賢夫人

三 臓の色に染みなん水

六 神さりまし大君の土

旭 若ふるものは堪へ難し

六 短刀逆手に心臓を

五 突き刺し追ひ追ひ五年

四 何に劣らぬ健氣なる

五 呼べど叫べど忠魂も

三 仇なれ今は早や水

中 枕ヶ枝渡る秋の風

寂りし露の一雫人々

雲然として涙なし

夢に夢見る心地

十六年

明治十年の戰

既に二年と見えけるに

五 惜しからざりしの命

五 恥辱に忍びて待つ程に

六 知れる人々は

四 心も空に馳せ行き

六 遺書に曰く

四 軍旗の敵に奪はれ

四 君の恵の露深く

六 忘れか時の移るべし

四 思ひ寄らぬ大変

遂ら奴法華ます〻い
蛇の身死するの機なと
君が滅ぶ偲ばれて
別けても伏見の宮殿下には
聞こし召されてハラ〳〵と
乃木の滅忠無二なるハ
實にや明治の軍神

陛下に殉え奉らぬは
言々悲痛の華の跡
涙注がぬ者は
乃木将軍の自刃ぜば
袖ぬらさぬ宜し孫
かの楠と憂でぬ
嗚呼君が霊はいづこ

ヨシ眠るとも勲功は
鏡となりて輝かん

萬代かけ武士道の
鏡となり輝かん

六代君

上之級

月に盈昃の減あり
潮も満干の習ひなり
盛者必衰の理まし
然し栄華に飽果て

潮も満干の習ひなり
浅れぬは人の老ぶか火
二十歳餘りの夢醒て

四 鎌倉山の樵風
三 吹き靡けなる草の家に
四 幼なきさへも容赦なく
六 茲に平家の嬌ふ
五 忘れ紀念の古代君は
三 京都はづれの辺山家
五 廣き浮世地狭めつ水

六〇

四 六十餘州隈もなく
四 潜み平家の公達は
四 掬め捕りそぐ滅中けり
六 三位中将維盛の
三 母夜又は前諸共ふ
三 大覺寺にぞ忍ばれて
五 二歳三歳は夢なれや

雲井の月も山里の一
軒端に曇る蓬廬の宿
ゆくへのさなく暮さるけるを
知る者ありて此由を
時に移さず北條時政
鎌倉殿の厳命を
無向の由傳へ申る
若しと思ひ煩ひし

段下
寝美に眼暗みしか
京都六波羅へ訴へければ
手勢を以て取囲みつ
六代君を迎ひの為め
郎黨を始め女房達
又今更に驚かれ

六代君上

六一

氷のごとき輙の鮒か
何とせん方なくば
仏は念珠取り出だし
迷ひ幸なき身故
称名唱へて後の世の
渡せば受る子心
譬へなき苦みなれど
仮小手殿も尽果て
斯て有るべきに非ざれば
六代を捕はれては
鬼に角もなりなん時
苦患助け給へ地天
今母上に別かるは
未来までも在ます

六二 六三 六四

六代君上

四 父上に逢ふ樂しみ
五 婆娑の縁
三 一ツ蓮の星
五 浩身代り
七 かりの浮世は仮の舎
三 母上百年の其後は
三 此年月の憂き艱難
二 煩ひ給ふ事かはら
六 歳は十二の未開紅
六 心ばへさへ凡を敷
三 此世の暇乞ひ受け
三 静に興る君さるれば
夏 道に勇む北條
中 共に首途の一ト時雨

地水地天

水地天

六五 六六

六代君上

晴間なく獲送せる雨時

五 忍ぶ要なき声我が

中 割れて付き未に逢瀬なき

三 乳母は取り分け身に世たのられ

六 遂るは野辺に走せ出で

三 思ひ処此慶なく彷徨けるが

四 其状態我が身かられ

大 跡には流々今は早や

時雨

岩にせかるる谷川の

涙は神も雨

時雨

五 跡我慕ふにつのられぬ

七 天に憧れ地に伏しつ

四 端なく出逢ひ時の尼

四 事落ちなく語りば

六四

尾も共音のもらひ泣き

先須迫吾も亦

人目忍びし甲斐なく

公達我殺害められ

蔑視るも分かざりしが

寂滅為楽に入るとや

浮世の習ひと観ずつ

衣の袖我絞りつ

集公達我乳みし

情け知らずの坂東武者に

身と同じ思ひ不

生滅々已に出る日も

光少不空は露塵の

切めては菩提我吊はん

六五

六代君上

我から憂き世に捨て衣
後世興樂の法の道
さはりながら六代君
坂山奥の高雄には
文覺上人在すなり
索め給ふと戻かに聞く
聖僧の力頼まんと
垢には染まぬ墨染の
踏分け歩行しが
まだ事も無くに暮すべ
鎌倉殿の囚みも深き
近頃は寺に稚児一人
いざさせ給へ共々に
勵まず洞にはげまれ

乳母も縋り法の綱
強て願へば上人
我は昔の恩誼忘
道も遥けき東路の
吃度吉左右齎すべし
迫る寒さの厭ひなく
鎌倉さして下られけり

辿り辿りて分け登り
慈悲の眼涙
法の誓ひ故
鎌倉殿へ命乞
事もせまれば歳
同寺を出で上人は
鎌倉さして下られけり

六代君

下段

三位中將維盛卿の嫡子
洛西大覺寺の山奥に
京都の守護北條時敦
有無我言さず引捕之
母君の歎きたよりも
命乞ひのりしかば

扨も平家方の隠れ人
年十二才の六代君は
母君と隠び給ひし
鎌倉殿の命にて
既に失わんとのりし
高尾の文覺上人より
情けに二十日の猶豫なり
取帰らむ迄待まける
木々の紅葉の散りまし
僅か二十日の残り葉は
吹かば晨の命かな
最早猶豫は成かたし
東海道迄下らむと
文覺が鎌倉より免文
時は霜月末つ方
月よる凄なき寒空の
いかなる風か冬の夜の
待ひど暮せど音もなく
文覺の聖に逢はむと
北條は六代君殺害

都城山うは立まけれ
西の宮川も忌はやく
大津の浦や打出の濱
近江の國とは名のみすく
悪しき都は遠江
平本松原となりければ
北條時政馬より降れ

今日限りの命かや
思へば心開の山
文覺坊ま栗棒原
美の尾張かくかちつ
我身城いかに駿河の國
伯興はハタと止りけり
無垢の真砂に敷波かな

六代君城墨に直し
文覺聖人に逢なく
人に見へさ也候はねば
藤倉殿は一徹の君なれば
山のなかは越えがたく
伯覺悟候へ申ける者
伯供に待る藤五城百さ也候

伯側近く平伏し
寄々駅路見張奏し
伯免されも難から者尾
此涂伯のいらめさ也給へ
此處す笑い来らまれば
六代君は言葉なく
暗涙にむせび宜は

我は此處にて斬らるべし
鎌倉へ無事に送り届け給へ
さきに歎かせ給ふ
ヤツカレは君死給へば後世
都へ帰り候儀は
まづ伏して歎十四日
肩に掛りし黒髪
汝は都に帰り母上に
我切られと聞て百さば
齊藤五八は涙ぬぐひ
死する身に候へば
恨み有れば水
六代君今は疾くと
雪のごとき撥の音

前の方へ垂れ給ふ
大慈大悲の法の加護
逢はせ給へ阿弥陀佛
首さし延べて待ち給ふ
斬るの役に選ばれければ
絶の姿掃へ奉れ
前後不覚に成りければ

西に向ひて手を合せ
眞土に拾ます父上
称名念佛目を閉じ
将野の工藤三郎親俊
太刀引ばめ後に廻り
目もくれ心消え果て
餘人に作せ候へと

太刀打捨てゝ退き引る
譲り合ひつゝ拍なり折から
黒衣の袖玄蕃に結び
声玄限りの旅の僧
近づくまに見ひのれば
文覺馬ちヒラけて降り
六代君は大将の子なれば

サラバ進れ斬れ我斬れと
遥かのなたの渚づたい
右手に笠もて打招き
馬躍らせて駆せ来る
待ちに待なる文覺なり
アナ待兎び給ひつゝ
外の子すれも免されと

中々に承引なく
文覺狩場に追ひ縋り
イザ五覺ぜと差出す
疑しなき免文なりければ
百舌鳥に採られ小雀の
拾ふ命ぞ嬉しけれ
一夜晴るゝ大空

那須野の将に出られ玄
様々と申し受けて候
北條受取披見するに
皆悲眉ぞ開きける
命の際玄追ひ就る
後の命は白ら一羽鳥
舞ひて帰るぞ自出度けれ

三 舞ひて帰るぞ自生なけれ

平二

芳流閣

一 嗚呼憐むべし大塚信乃は
二 親の遺言紀念の名劔
心に占めつ身に傳へけつ
二 難苦の中に年月経て
三 得がたき時我得てしば
三 遥ぐ滸我へ齎して
四 名我揚げ家我興すべき
四 万の福はわざはひと

振かはりたる村雨の
尽や我身我辟力も
花れば當座の辱我
鞭多の国我切り開く
輙く攀ぢつ登れ共
如何ぼせど躊躇しつ
時し頃は六月廿日

一 刀は舊の物ならぐ
讐となりぬ憾なる
遁けなむものと大塚信乃
芳流閣の頂上に
脱れ去るべき道もなく
如ばし息我ば休めたれ
米のふも今日も乾蒸の

熱砂わたる數丸一
下には大河滔々川千鳥
流は名に負ふ坂東太郎
進退さに谷まれ五
飼現八唯一人
層二層三層
狂ふが如く攀ぢ登り
四隙なく波に伏て
生死の海に入る
水際の小舟猶絶えて
搦る俄の捕手承はる
身を震はせて登りぬ
搦を傳ふ鼠乃
淀ずと呼掛て

大傘なる十手閃加
組まとすれど寄せ付けず
五疾視ひつて立なる形勢
大蛇のねらふにさも似たり
四警固の武士も堅唾を呑み
六如何なる漢や有つらん
一発石を受蔵む十手の輪
五急遽に信乃に寄近き
七互に漢を窺ひつ
浮図の上なる鶴の巣を
四廣庭に控たる成氏公を始め
四手に汗握り見詰めば
四信乃が切込む太刀風
三すべる蒙を踏み駐め

四 一上一下虚々實々 五 寄せては返す太刀音 八 被声
七 両虎深山に挑む時 六 鋒然として風 五 叢水
五 二龍青潭に戦ふ時 四 沛然として雲起るも
四 斯やうばかり恬しまら 七 天に聳ゆる高閣乃
六 棟に爭ふ未曾有の晴嵐 五 足場我揣り撓まず去ず
五 疊かけて打つ太刀我 現 八右手に受け流し
三 返す拳に附け入りつ 四 ヤット被けなる声諸共

五 眉間我望んで夕々と打つ 十手我丁と受け 四 番る
四 信乃が又は環際より 河はれ水を折れたれば 倉
現 八得たりと無手を組 四 互に利腕確と取り
捻倒さんと勢ひ合せ 四 揉みつ揉まれつ 五 切ハ臣
三 此彼齊しく踏み辷り 五 河辺の方へ覆車の表
恢より落ちに 四 嵐なくば 五 下
五 正るべくもなければ 六 高低険き峯の勢
五 幾十尋なる底の上より

未遥なる河水の一
水際に繋げる小舟の中へ一
傾く舷を立つ浪は
覆ひて張り断りて
真直中へ押出されし
誘ふ水なる泡三
行方も知らずなりにけり」

底には入らぬ程水下
累り合ひつ落ちたりける三下
ザンブと音す水泡
射る矢の如き早川の
志かも追風と虚潮は
徒方も志らずなりにけ

吉野山

上三段

平二
元弘三年四月の一
賊軍六萬有餘騎
おりれ是人も大塔の一
峰高うして道細く
山峻うして苔滑に
大ぞに村上父子始め
輙く落べうも見へざりし
一番

末つ方の頃なりしが
吉野の孤城攻押囲み
寄せ討んと謀りし
勤王の勇士籠りけれど
かるに賊の案内者は

城の背面より忍び入り
左右の人々奮戦して
やがて正前に寄集ひ
此方彼指して大手より
鎧に矢ぬき折り掛けて
招く尾花のうれなびく
いと勇ましく見へにけり
宮の正座所に襲ひかゝれば
漸く敵に打ち散らす者
軍議に凝す折もなし
大太刀提げみだし髪
喘ぎ馳せ来る武者一騎
征矢の辭立つ荒猪か
是ぞ村上義四郎義光は

忽ち正前にしぶまづ
最前のなくかひに
敵は新手に入れ替へ死
今は敵はず覓へ候故
さばれ戰ふ者なくば
左れば忍ぶる事なれど
正物の具に下賜れ
勢ひ強めて申げる者は
味方は息つく暇もなく
直寄に寄せければ
一とまづ正閑に給へかし者
敵はさらに進ぬ
錦の正鎧直垂と
正諱に冒一拳に

四 義光敵我欺き申す五番下
五 容れさせ給へとこひ奉れ共
七 なんぢが如き忠臣我
五 我も共々なせがんこと
三 並居る人々之我聞き
七 義光感涙に咽びつゝ
三 勝敗は戰の常
六 何卒汝が微忠我ば
三 家は沈たまはず
六 いかで一人のこすべき
三 實に雖有るべなさけ
五 鎧の袖我しぼりけり
五 今旨に悖るは恐れど
三 後の五運もわる物我
三 なぶて辞ませ給はれ
三 只管願ひ上げければ
五 禮直垂物の果まで
六 我幸にのがれなば
六 若し我運の傾きなば
三 かたトけなくも義光に
三 祈奉明神の五前奉ば
三 ゝ〳〵五弁給はれ
三 家は實にもとぼけ
五 是非もなく下されぬ
六 汝が冥福我祈るべし
六 泉下に沒我体べし
三 厚き言葉我賜ひつゝ
南に向ひ聞かせけり

見れば義光一の木戸の櫓に登り
見送りまつり今はとて土
塁球のうはべに大音声
今上茅三の皇子地
今天下の為めに怨球呑み
揮みて後に汝等の
腹切る時の亀鑑にせよ
ぱるかに家の方後影
櫓の山間球切り落し
我ひとりは人皇九十五代
一品親王護良なるぞ水
自害なさんず有様球
武運忽ち盡き果てい
賊球ハッタと打ち睨み
澄球脱ぎらより
二重小袖球押し開き
真一文字に五腹球
咽喉球ぐさと突き通し
寄手の大軍之球見て
ぐ五首球給はん欲
人と人ならぬ

蹴落しながら練絹の
太刀球逆手に掴り活め
掻切り給ひ太刀も
うつ伏せにぐ伏したる
家はほ自害なりるぞ
我もと走せ五ぐ
寶に勿狼の比類

悪しく云ふもたらかぬ
宮は安く久方の
天の川へぞ向はせける

嗚呼義光が忠死のため
天の川へぞ向はせけ

吉野山

去程に大塔の宮は
山の峽よりよぢのぼり

わづか十二人の法師
前に山路なりける

百心いかにたばかむ
落るなみだは時なる
茲に村上義光が嫡子義隆ハ
扨も吉野の執行
賊徒かたらひ五百餘騎
進退あーにきわまりて
義隆キット思ひ
父の兼ねて宣ひ

経ふ人々顔見合せ
補の時雨と見へたり
宮に従ひ居なりしが
利慾に迷ひ白物共
前路遮り来りけれバ
逃れ途もなかりしかば
父の兼ねて宣ひ

死すべき時は此時ぞと
城内は義隆承はり
ぶづれへなりと遠かに
いひも終らず義隆は
ちぐらきりなる細道に
敵城相手に待ちかけ
山風の前に咲く櫻

宮の御前に平伏して
ばーたり共防ぐべし
落ちさも落へ七人々々金々
敵にむかひて唯一騎の
立ちふさがりて眼にのみ
心の程の雄々しさは
散るぞ目出度花なるべし

此時賊軍どよめき
ソレ討取れ功名せよ
道幅狭く谷深く
並らび進まん様もなく
困ぶ果てたる状なれば
岩石少猶にオッ取り
バラリ〳〵と雑ぎ倒し

宮は彼方に見へるぞ
ソレ寄せ来れ
苔むす巌ばだち
廻りて出でんすべもなく
義隆さありとの笑
馳せ寄る馬の諸膝
平頸切りて驚かし

敵我谷へ蹴落し水
きすがに猛き義隆も
心矢ぶにはやれども
流るゝ血汐は谷川の水
次第に義隆は
敵も懲りてか近寄らぬ
義隆歯に攀ぢ上り
半時ばかりも支へしが
身は金鐵にあらねば
負し數ヶ所の深手は
水も涙もつきはて
痛手に疲れ果てゐるが
僅の隙我得なりかば
家には如何せんと

ふ程さしかぶり眺むれ共
心安しとよろこびつ
たはすぶにも伏し拝み
十八才我一期と
及我術み岩上より
飛入りて共に死したりけり
名は世界に輝きて
早や落ちぬと影なき
家の落ちにし跡我水
我事是にて終れりと
腹十文字に掻切て
手仮の谷に真逆
揃ひ揃ひ親と子の
誉は千載にかゝるらん

かゝる忠義の父子なりしを
高野の方へ落ち給へ

七騎落

北慶は河の國ぞ相模なる
荒き浮世を忍びつゝ
船を求めて汀のかた

真鶴岬に立つ波も
主従僅か七八騎
吟じ行く大将
金

宮は再び虎口を逃のがれ
高野の方へぞ落ち給ひ

清和源氏の名末流
九兵衛の夜頼朝卿
屈める蟻を習ひ
二十まりの三日の日に
敗れて恥を忍びつゝ
要害の國へと志し
頼朝卿は温然
流れを汲み給ふ
潜める龍を學びしか
治承四年の中の秋
石橋山の戦争に
落ち行く先は水泡の
船出のまぢかに憂しなる
嵐を凌ぎ云ふ春

嘲實平と今此處まで
問はせ給へば實平は
先づ田代の冠者殊初
土屋の宗遠虎房昌俊
岡崎の義實
各へ申せば頼朝卿
のるは八騎と申すなるか

借しつる者幾人ぞ
佐藤の人数へつ番
野二郎の次郎忠氏
やつがれには弥太郎遠平
君殊合せて八騎と
如何に實平此船は
七騎は家の幸にて

八騎は家の幸なるべ
君の仰せ實平は
誰殊か捨ん捨小舟
前途も知らず今の
況や累祖相傳の
誰殊搭ばと様もなし
暫くのりて實平は

淮か船すりわろせよ
佐藤の人殊見渡して
波のまに〳〵君の
別るゝ人のこのうべ
主従なれば實平は
国に果てぬ指なりけり
岳嵩氏に打ち向ひ

岡崎の殿より御身には
陸にも近寄けるゆゑに
岡崎義實言ひらく
甲斐しくも用立たる
我に伏彼の文なきも
ただ敵なりと聞くならば
捨つるも取て惜まるべき

艫の方にはすれば
おりて給へと云ひけれども
やつがれ最早老ひなれば
思召しの事なるか
勇は何ぞ方るべき
武蔵鑾野に成ぬ
我子の與市義忠が

石橋山の戰ひ
終に討死しけれども
君の御前遠見屈せ
寡平敵よりも身ぶり
一人はおりて然らんと
國禦城離れ遠平は
誰の彼のといはんより

僕野五郎と引き組んで
親子二人の其かわり
然る後ぞ死すべけれ
親子共々居られれば
いへる言葉の理りに
父の前にて出で来れば
遠平自らおりなんと

いへる我耳て宴平ハ
彼先長き我君よ
我は先いたり老の身は
一と風づゝに散りそ
最早此世に望みな
我に代りて見届けよ
親子互ひの争ひよ

其方はまだ年若
仕へて忠我盡すべし
彼の木の葉にさも似たり
冥途の旅路近けれど
其方は君の為事
さらばされよりかりなる
斯とは果てゝ遠平は

引枝つきて翻然と
斯と見るより宴平が
耳やきかずや遠平は
沖の方へと一つ
波路我分けて遠ざかる
絆も切るる別れかな
手うち鳴つゝ飛ぶさまも

汀の方へ飛びれり
遠平ばと云ふ者
覽切りて五船
つけば五船は和田の
ものれず親子が恩愛の
知らずや演千馬
いとゞ情れ我ます

四 俄に曇る海と陸
五 武者ぶるいまの鎧まも
六 吹き来る風に波あれて
七 かゝる涙の雨やざめ
八 漂ふ船も来つ水ぬ
九 何地戎的と定めなく
十 開くる雲ゆゝ樂けれ
十一 開くる雲ゆゝ樂けれ

大正四年四月三日印刷
仝　年四月七日發行

定價金參拾錢

作　曲水也　田旭嶺

發行兼印刷者　大阪市東區南渡邊町八番地　前田梅吉

發行所　大阪市東區南渡邊町八番地　前田文進堂
電話東四九九八　振替阪一二四七二

東京市神田區表神保町十番地　巖山堂書店

禁轉載

琵琶の起源と作者

琵琶は其昔印度に生れ、支那に傳はり而して日本に渡來せしものにして、平家琵琶滅亡後曲節野卑に流れ座頭琵琶に崩れしを旭翁橘智定氏多年苦心の結果茲に完全なる筑前琵琶が出來たのである、歌の作者としては工學士玉蘭逵邑容吉氏が敦盛海洋島等を始めとして苦心に苦心を重れられ今日に至つたのである、橘旭翁氏逵邑玉蘭氏の功勞や實に偉大なるもので有る、尙九州には今村外園、南部露庵氏等の作者が有る。

◎習得者の心得

一、琵琶は歌ふものにあらずして談(カタ)るものであるから一言一句文章の意味をよく理解して歌中の人と成り彈奏すべし。

一、筑前琵琶の特長たる流しの内、春節は艶音にして優長なる事恰も春日花に對するが如く、夏節は强音にして森嚴なること初夏新綠發生の感ある如し、秋節は清音にして洒落假令ば霽夜明月を眺むるが如く、冬節は愁音にして乾燥恰かも木枯の梢頭を吹くが如し、又山越節は舊來の筑紫節にして最も婀娜たる調子なり、旭節は右と正反對の調子にして詩吟の趣あり、春節は七の音調にて起り、夏節は六、秋は五、冬は四より起ると心得べし。

一、初學者は琵琶の合の手（彈法）と歌と連絡調和せぬものだが此合の手は歌詞の喜怒哀樂を一層完全に表はすものであるから歌の研究と共に彈法の研究を怠つてはならぬ、例せば悲哀の合の手五號、十一號等

の手も彈き法が惡るいと少しも悲哀には聞へない、折角一生懸命に歌つて悲哀を表して居ても合手の彈き法が惡るい爲めに歌を殺してしまふから彈法をおろそかにしてはいかぬ、悲哀の手は悲哀に勇壯の手は勇壯に彈かればいかない、即ち彈法の功拙は歌の生死に關するものである。

一、琵琶の習得法―初學者は初めから難づかしい歌曲を習ひたがるものだが小學校生徒が大學校の學科を習つて解る筈が無いのと同じ事で段々と初傳、中傳、奥傳、皆傳と階段を踏んで行かればいけない、又一つの歌曲を一日でも早く揚げて數ばかり進みたがる人があるが大變にいかぬ事で一曲がよく腹へ入つてしまへば次に習得すべき歌曲は容易に解る事が出來る、然るにどの曲も〳〵荒覺えにして置くと前のから前のから忘れてしまふからよく注意すべき事で有る。

一、聲の練習法―聲は必ず腹から出さぬと聽者に感動を與へない、聲の惡るい人でも毎日練習さへ怠らなかつたら自然に出る樣になるものである、又どれ程調子の高いよい聲の出る人でも調子の底い先生に習つて居ると知らず〳〵に調子が底くなるものであるから自宅で稽古する時毎日一回だけ演奏會に彈奏するつもりで自分の調子より半本又は一本ぐらゐ高い調子で一時間ぐらゐ練習するのがよい、然らば知らず知らずの内に聲量が増して來る。

左に音聲研究に際して注意すべき條項を示して置く。

一、酒、酢、わさびの如き刺激物を飲食せざる事。

一、夜更かし及び朝寢をせざる事。

一、演奏せんとする前多量に喫煙すべからず（禁煙に越す事無し）

一、茄子の類を食さぬ事。

一、演奏せんとする五時間程前に肉食する事。

一、演奏せんとする三十分程前玉子を食する事。

一、演奏前には端座してなるべく身體を安靜にしてあまり歩行等せぬ事。

一、姿　勢―何より目立つて見えるのは彈奏者の姿勢である、端然と姿勢を正して居ると聽者の方でも勢ひ眞面目に成つて聞く氣になるが彈奏中に首を振つて見たり歌曲が佳境に入りつゝある場合に不眞面目な姿勢でギロリ〳〵と聽者の顏を睨廻したりすると折角身を入れて聞かうと努めて居ても惡感情が起つてつひ惡騷ぎの一つもする樣になるから注意せねばならない。

一、歌詞の間違―琵琶の彈奏者には歌詞の間違つた處を平氣でやつて居る人が有るが心ある人が聞いたらよい物笑ひになるから充分に文章は注意して間違ひの無い樣にせねばなりません、本書に關し曲節の不審等有し時は切手封入の上御聞き合せに成れば直ちに回答致します。

南區千年町　　緑水會長　水也田旭嶺識

既刊春の巻目次

君の代　敦盛（上段）
敦盛（下段）　城山
小督局　熊太郎義家
錦の御旗（上段）　錦の御旗（下段）
赤坂源藏　月照
常陸丸　備後三郎
平野次郎　白虎隊
廣瀬中佐　蕾の花
曾我　木村長門守
勾當内侍　以上

既刊夏の巻目次

春日野　臺灣入
河内の宿　松の廊下
扇の的　石童丸
太田道灌　四條畷
竹林只七　叢雲
宇治川（上段）　宇治川（下段）
湊川　梅若丸
海洋島　靜御前
以上

既刊秋の巻

川中島　
湖水渡　
夜の鶴　
伏見の吹雪　
佐渡の若竹　
佛御前　
泉の三郎　
小楠公　
勸進帳　
義民の亀鑑　
隅田川　
吉野靜　
以上

既刊冬の巻

大高源吾　
櫻井の驛　
橘中佐　
伊賀の曙　
菅公　
護良親王　
義士の本懷　
靈馬の連　
菊水　
高田の馬場　
南部坂　
以上

雪の巻既刊

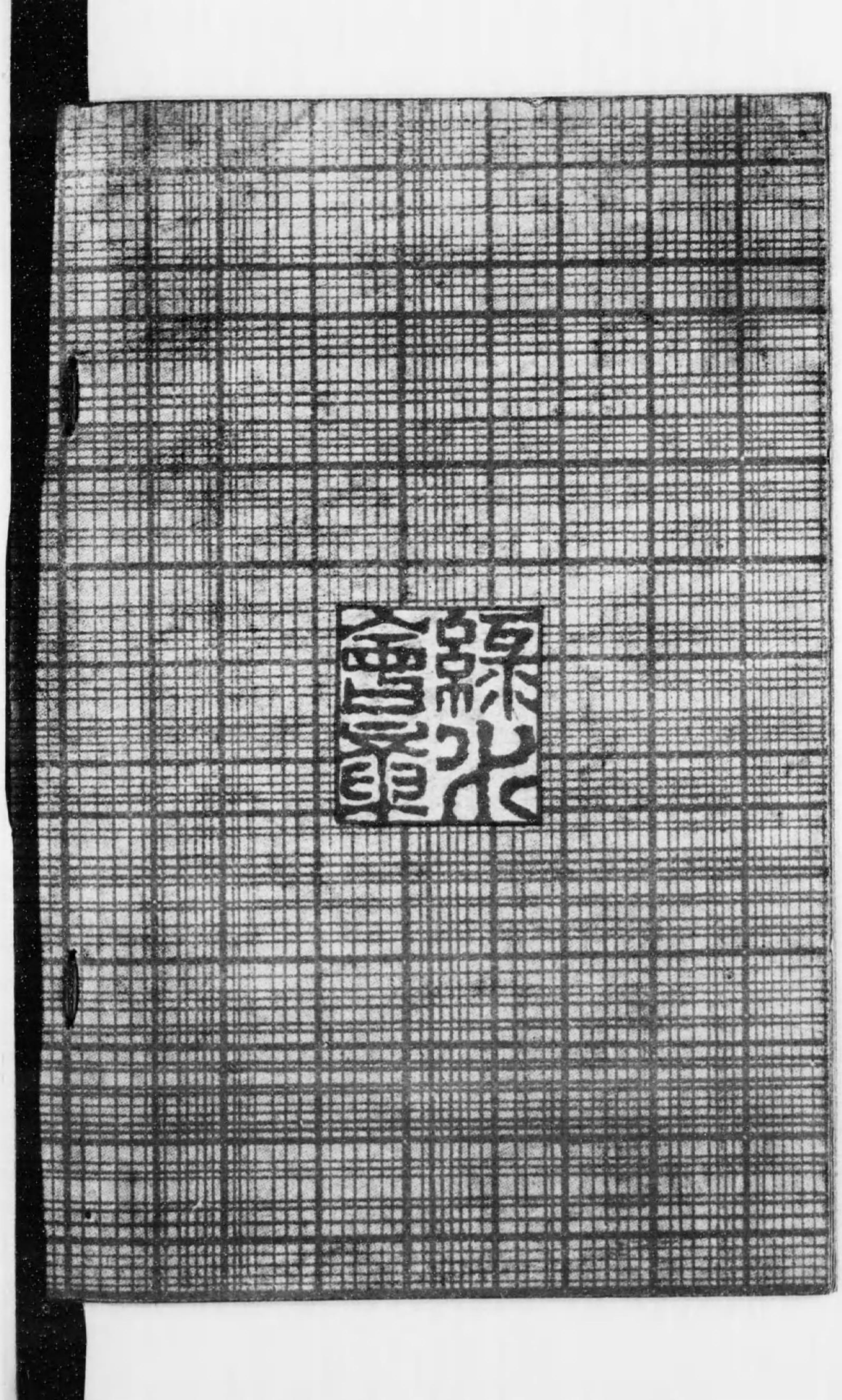
菊の礎　羽項
高山彦九郎
山科の別屋　島
櫻田の泡雪
名和長年
山崎合戦
梅若丸
盃載樹
稲村ヶ嵜
沖積介
朝比奈三郎
以上

月の巻既刊

實盛
蒙古の寇浪
千手の前
船坂山
濡衣
小松原上下
名劍日本號
金剛南山
弓矢の誉
袈裟御前上下
小督局下
旅順の魁
以上

花の巻既刊

別れの盃
小袖曽我
荒乳の閨
滑稽藤原信勲公
同國盡し
乃木將軍
六代君上下
芳流閣
吉野山上下
七騎落
以上

筑前琵琶
端唄集
近刊

終